

17. キリストに倣う

ペテロの手紙#17

<https://ichthys.com/Pet17.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

キリストに倣（なら）うためには靈的成熟が必要です：キリストに倣うということは、イエスが歩まれたように歩むことを意味します。キリストに倣うことは、靈的成熟なしには成し遂げられません。そして靈的成熟もまた、聖書に示された徳(virtue)を深く理解し、粘り強く実践することなしには得られません。徳とは、真理を個人の人生に適用したものです。私たちが聖書の真理について知っていること、理解していること、信じていること——そのすべてが、私たちの思考の中で習慣的なパターンとなり、さらにそれが言葉や行動へと現れていかなければなりません。しかし、私たちはこの靈的成熟を目指す歩みの中で、一人きりにされているわけではありません。神は、教会を通しての助けだけでなく、他にも多くの支援を備えてくださっています。その中でも特に、私たちに与えられているのは、模範としての完全な手本——すなわち、主イエス・キリストの徳に満ちた生涯なのです：

そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、愛にあって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである。(エペソ書 4 章 11-16 節)

私たちの模範であるキリスト：クリスチャンの生き方、すなわち「クリスチャンとして歩むこと」は、聖書に教えられている諸々の徳によって特徴づけられるべきものです。すでに見てきたように、愛はこれらすべての徳を包括しており、完全な愛に満ちた生涯は、必然的に完全に徳に満ちた生涯となります。そのような生涯を実際に生きられたのが、

私たちの主イエス・キリストでした。主は地上におられた間、神の愛を体現し、その愛をあらわされました。そして私たちと同じように(ただし、はるかに厳しい形で、[ヘブル 4 章 15 節](#)参照)、人生のあらゆる困難に直面しながら、御自身の模範をもって私たちに手本を示されました。私たちは、キリストの足跡をたどることによってのみ、神に喜ばれる徳に満ちたまっすぐな道を歩むことができます([第一ペテロ 2 章 21-25 節](#)： 参照：[マタイ 16 章 24 節](#)； [ヨハネ 13 章 15 節](#))。

聖書はイエス・キリストについて書かれています([ヨハネ 5 章 39 節](#))。それは、神がイエス・キリストを与えてくださった愛を示す書([ヨハネ 3 章 16 節](#))であり、なぜなら愛は神から出ており、神は愛だからです([第一ヨハネ 4 章 7-8 節](#))。この意味で、聖書のすべてのページは神の御性質とキリストの愛を映し出しており、私たちは聖書を学ぶとき、この視点を持ち続けるべきです。これまで見てきたように、霊的成長とは変化の過程であり、その最終的な目標は、私たち一人ひとりの内にキリストの御性質が形づくられることです([ガラテヤ 4 章 19 節](#))。この高い目標を達成するために、私たちは「キリストにならう」([第一コリント 11 章 1 節](#))こと、「キリストを着る」([ローマ 13 章 14 節](#))ことを学び、やがてキリストが「私たちの心に住まわれる」([エペソ 3 章 16-17 節](#))ようになる必要があります。これらの各聖句の文脈を見れば明らかなように、キリストの御性質をかたどることは、私たちが学んできた思いの変革と密接に結びついています。[第一コリント 11 章 1 節](#)で「キリストにならうように」と命じられているのは、自己犠牲の文脈の中でのことであり、他の人の霊的成長を自分自身よりも優先することを意味しています([第一コリント 10 章 23-33 節](#))。ローマ 13 章 14 節の「キリストを着なさい」という命令は、罪の性質に由来する悪徳を退け、品位ある霊的歩みをするよう求める文脈にあります。最後に、パウロが「キリストがあなたがたの心に住まわれるように」と祈っている([エペソ 3 章 16-17 節](#))のは、「内なる人が御霊によって強められる」ことを前提としています。この強められる過程は、神のことばに教えられた真理の原則に私たちの思いを調整することによって成し遂げられるのです。主の御性質を見倣うことは、主のように考え始めるときのみ可能になります。すなわち、自分よりも他の人の霊的益を第一にし、罪の性質の誘惑を退け、神のことばと御霊にこそ力を求めることによって可能となるのです。

謙遜におけるキリストの模範：もし私たちが本気で自分の思いを改革しようとするなら、まず最初に築くべき思考の型のひとつは「謙遜」です。私たちが「キリストにならう」([第一コリント 11 章 1 節](#))ためには、キリストが持っておられたのと同じ謙遜な心構えを養わなければなりません。自分自身をすべての事柄よりも優先する「高慢(プライド)」は、サタンとアダムの両者に共通する最初の罪でした([イザヤ 14 章 13-14 節](#)； [創世記 3 章 6 節](#))。高慢、すなわち傲慢さは、他者への愛と配慮という自己犠牲の精神の正反対にあります。謙遜とは、他の人のために自分を低くするという徳のある心構えであり、

私たちはこの姿勢を保つよう命じられています。そして、この態度の模範こそが私たちの主イエス・キリストなのです：

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ書 2 章 5-8 節)

パウロが示したキリストの謙遜で愛に満ちた自己犠牲の模範は、私たちの小さな自尊心が日常で受ける些細な侮辱などを正しい視点から見直させてくれます。語源的に見ると「傲慢(アロガンス)」とは、本来自分には権利のない名誉や待遇を求めることを意味します。しかしキリストは、まさに神として正当にそのような待遇を受ける資格を持っておられたにもかかわらず、愛のゆえに自ら進んで僕(しもべ)となり、私たちの身代わりに死なれました。主に従うと告白するキリスト者として、私たちはキリストのように「徳をもって考える」者となり、謙遜の心を保たねばなりません。私たちは他者のために命をささげるよう求められてはいないかもしれませんが、少なくともキリストが自分のためだけでなく、すべての人のために死なれたという視点を保つ努力はすべきです。もし「大牧者」であるキリストが私たちの兄弟姉妹のために命をささげられたのなら、私たちは少なくとも彼らに寛容と赦しをもって接すべきではないでしょうか。他者に仕える姿勢——自己中心ではなく奉仕の心——は、徳に基づく思考(virtue thinking)の過程において欠かすことのできない要素です。したがって、謙遜は成熟した信者の思考を特徴づける徳のひとつです。謙遜が欠けている、あるいは傲慢が見られるということは、その人が真理の原則に心を集中しておらず、キリストを模範としておらず、また徳をもって考えていない確かな証拠なのです。

試練におけるキリスト： 私たちが自分の考え方をまず変えることで生活のあり方を変えようとする時、悪魔とその多くの手下たちは、私たちの前向きな歩みを黙って見過ごすことはない、ということに心を留めておかなければなりません。主イエスが荒野でサタンの誘惑に直面したとき、みことばの真理によってそれに立ち向かわれたように([マタイ 4 章 4-10 節](#))、私たちも常に同じように備えていなければならないのです。これは、人生のあらゆる出来事に対して毎回特定の聖句を探し出して対処しなければならないという意味ではありません。むしろ、主の模範を通して学び取った積極的な美德に思いを集中させるという習慣こそが、試練の時に私たちを支える助けとなる、という意味です。それは、まさに主が試みを受けられたときにもそうであったのです。さらに、試練や誘惑には常に二つの要素があります。ひとつは、私たちに「圧力をかける」外からの出

来事や刺激。そしてもうひとつは、サタンがいつでも私たちをつまずかせる助けとして頼みにしている、私たち自身の内にある罪の性質です。

信仰をもって生きる時、誰にでも「試される時」や「誘惑に負けそうなき」があります。けれども、それらは実は、私たちが信仰の成長へと進むために欠かせないものです。このような試練をどう受け止めるかには、少なくとも二つの見方があります。ひとつ目は、困難の中でも神さまに従うことができたという「前向きな歩み」であるということです。もうひとつは、そのように歩むことが、自分の中の「罪に引きずられる性質(古い自分)」に打ち勝つことでもある、ということです。私たちが「キリストを身にまとう」([ローマ 13 章 14 節](#))というのは、主イエスのように歩むということです。そしてそのためには同時に、「古い自分を脱ぎ捨てる」([コロサイ 3 章 9-10 節](#))こと、つまり自分中心の思いを手放すことも必要です。そのために私たちは、いつも神のことばの真理に目を向けることを学ばなければなりません。これこそが、「徳のある思考(virtue thinking)」の中心となる考え方ののです。

私たちは、自分の経験を神の真理の原則に照らして理解することを学ばなければなりません。自分の置かれた状況に神のご計画を合わせようとするのではなく、神が定められたご計画に自分を合わせていくのです。荒野で悪魔がイエスを惑わそうとしたように、サタンはいまも私たちを真理から引き離すために、誘惑や混乱、魅力的な罠に満ちた世界の仕組みをつくり出しています。しかしキリストは、御父の御心と御言葉に完全に心を向けることで、すべての試練に勝利されました。悪魔に誘惑されたとき、主は真理の言葉によって応えられたのです。私たちも、試練のときに主のように行動するためには、同じように真理で応えなければなりません。そのためには、まず私たちの思いが常に神の真理に根ざしていなければならないのです。困難に出会うたびにすぐ聖書を開くことは、いつもできるとは限りません。ですから、日々の生活の中で、神の真理を心にしっかり蓄え、いつでも使えるようにしておく必要があります。私たちは、聖書に教えられている「徳(美德)」——つまり、正しい行動と態度の原則——に、常に心を集中させる習慣を持つべきです。

キリストが私たちの心におられること：私たちの「内なる人」が強められてはじめて、私たちは主に心を集中させ、キリストが本当に「私たちの心に住んでおられる」と言えるようになります([エペソ 3 章 16-17 節](#))。この「内なる力づけ」の過程は、「信仰」を通して、「聖霊の助け」によって成し遂げられ、そしてその土台には「愛」があります。順序ははっきりしています。信仰と愛が成長していくと(神の助けによって)、それが内なる成長の力となり、やがてキリストが私たちのすべてとなるのです。ですから、内側の人が強められることは、「徳(美德)」——すなわち、聖書に基づいた正しい心の態度と行い——を育て、それに心を向け、それを実践することと切り離すことはできません。このよ

うにしてこそ、私たちは使徒パウロのように、キリストを人生の中心に置き、「生きることはキリスト、死ぬことは益です」([ヒリピ 1 章 21 節](#))と言えるところに到達することができるのです。神が望まれるようなキリスト者になるためには、成長を続け、成熟した信仰に達し、ますますしっかりとイエスに目を向け、主のような徳に満ちた歩みをする必要があります。

徳の思考の方法： 聖書には、信仰者たちのすばらしい徳の行いがたくさん記されています。ヨブの忍耐、ダビデの喜び、ダニエルの信仰、パウロの平安を持ちたいと願わなかったクリスチャンがいるでしょうか。けれども、これらの徳は、私たちにも手の届かないものではありません。「雲のように取り巻く証人たち」([ヘブル 12 章 1 節](#))——つまり、信仰の先人たちはみな、この地上のもやの向こうにある真実の世界を、信仰の目で見通していました。だからこそ、彼らは忍耐し、信頼し、喜びに満ち、心の平安を保つことができたのです。彼らは、この世の苦しみや失望、混乱や不安が一時的なものであることを知っていました。そして、神という永遠の現実、天にある私たちの本当の故郷、そしてその国の民としての使命のほうか、はるかに大切であることを理解していたのです。このような見方——神の視点に立って生きるという姿勢——は、すべての信仰者に開かれています。しかし、それは自動的に身につくものではありません。意識的に、聖書から学んだキリストの徳を生活の中で生かしていく努力が必要なのです。そのために、ここではまず、いくつかの基本的な実践の原則を考えてみましょう。

1. 基本的な方向づけ： もし私たちが知らない森の中で地図を頼りに進もうとしても、その地図を正しい向きに合わせなければ、地図の情報はあまり役に立ちません。地図の向きを正しく合わせてこそ、そこに書かれた情報が実際に見ている景色とつながり、意味を持つのです。同じように、聖書に書かれている徳(とく)は、私たちの心の中にある「羅針盤(らしんばん)」のような働きをします。聖書の真理と、私たちが実際に生きている現実の世界とのあいだをつなぐ橋として、人生の方向を定める助けとなるのです。具体的な徳を学ぶ前に、聖書がどのように私たちの考え方を神の御心に向けて整えるよう導いているかを見てみましょう：

- 思いを地上のことではなく、天にあるものに向けること([コロサイ 3 章 2 節](#); [ピリピ 3 章 19-20 節](#), [4 章 8 節](#))
- 高ぶることなく、謙(へりくだ)った思いを持つこと([ローマ 12 章 2-3 節](#))
- 仲間の信仰者を分裂させるのではなく、互いに一つになれることを考えること([ローマ 12 章 16 節](#), [15 章 5 節](#); [第二コリント 13 章 11 節](#); [第一ペテロ 3 章 8 節](#))
- 人間や悪魔のような考え方ではなく、父なる神のように考えること([マタイ 16 章 23 節](#))

- 自分の利益を求めるのではなく、御子イエスのように考えること([ピリピ 2 章 2-4 節](#))
- 肉に従ってではなく、御霊(みたま)に従って考えること([ローマ 8 章 6 節](#))
- 子どものような考え方ではなく、成熟した信仰者として考えること([第一コリント 13 章 11 節](#); [ピリピ 3 章 15 節](#))

これらは、私たちのクリスチャンとしての思いが進むべき、とてもはっきりとした「方向」です。これらをしっかり心にとどめておくことで、神に喜ばれることを思いめぐらしながら、正しく、徳のある「方向」へと歩み続けることができます。

2. 徳の成長の段階： 物事をできるだけ大きな視点で見るとは、しばしば難しいことです。すでに見てきたように、すべての徳は「愛」に集約されます。すなわち、神がイエス・キリストを通して示された愛、そしてそれに対する私たちの神と人への愛の応答です。聖書全体は、この最も大切なキリスト教の徳「愛」を学ぶための訓練の場といえます。しかし実際のところ、私たちは不完全で、すべてを知っているわけではありません。だからこそ、もっと具体的でわかりやすい形で示されることを必要とします。特に信仰の初期の段階では、しっかりとつかめる指針が必要です。そのための最初の助けとなるものが、使徒ペテロの第二の手紙にあります。そこでは、もっとも基本的なクリスチャンの徳のいくつかが挙げられています。ペテロはそれらを、重要性の順というよりも、自然な成長の順序に沿って並べています。それはまるで一つひとつが次のものの土台となる積み木のように、前の徳の上に次の徳が築かれていくのです。

それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制<自制-新改訳>に忍耐を、忍耐に信心を、信心<敬虔-新改訳>に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。これらのものがあなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう。(第二ペテロ 1 章 5-8 節)

第二ペテロで示されている徳の順序は、信仰 (faith) → 徳 (morality) → 知識 (knowledge) → 自制 (self-control) → 忍耐 (perseverance) → 敬虔 (godliness) → 兄弟愛 (love of the brethren) → 愛 (love) となっています。これらの徳は、互いにまったく独立しているわけではなく、ある程度重なり合っています。けれども、ペテロが示したこの順序には深い意味があります。この流れを理解することで、より徳の高いキリスト者として生きるための成長の道筋を見いだすことができます。使徒パウロの有名な「三つの

徳のリスト」([第一コリント 13 章 13 節](#))と同じく、徳は信仰から始まり、愛で完成するのです。

- **信仰**—すなわち、神と神の御子イエス・キリストへの全き信頼——は、すべての成長の土台です。まず私たちは、神を信じること、神の御子とその救いのわざを信じること、御言葉の真実さを信じること、そしてよみがえりと報いに関する神の約束の確かさを信じることから始めなければなりません([ヘブル 11 章 6 節](#))。この信仰こそが、霊的成長への第一歩であり、他のすべての徳が築かれていく揺るぎない岩の基礎なのです。
- **徳**—「morality (道徳)」という語は、ペテロがここで使っているギリシャ語 アレテー (ἀρετή / aretē) の意味を適切に表しています。通常は「徳」や「優れたもの」と訳されますが、トゥキディデスなどの古典文献では、この語が「その場にふさわしい正しい行い」や「義務の遂行」という意味で使われることもあります。ペテロの意図しているのはまさにこの意味——「正しいことを行うこと」です。したがって、ここでは「徳」よりもむしろ、人生のあらゆる場面で正しく、誠実にふるまうという道徳的な姿勢がふさわしい訳となります。
- **知識**—知識 (Knowledge) は、ペテロの挙げた徳目の中で次に来るものです。私たちはまず、神とキリストを信頼し、自分の行いを正すことを学びます。その次の段階として、神のことばにある教えや真理の原則を深く理解し、知識を広げていく必要があります。ただし、これは「最初から知識を求めてはいけない」という意味ではありません。むしろ、キリストを信じた直後から、常識的に見ても明らかに誤っている行いを正すことが求められます。そのうえで、さらに成長を続けるためには、神のことばという源から豊かな知識を得ていくことが欠かせません。信仰が土台であり、正しい生き方がその上に築かれ、そして知識がそれらをさらに強く支えるものとなるのです。
- **自制**—自制 (Self-control) は、正しいクリスチャンとして歩むために欠かせない重要な要素です。使徒パウロが総督フェリクスに福音を語ったときにも、義 (righteousness) と来るべき裁き (judgment to come) と並んで、この「自制」を強調しています([使徒行伝 24 章 25 節](#))。「自制」という言葉はギリシャ語でエンクラテイア (ἐγκράτεια / engkrateia) といい、新約聖書では、さまざまな欲望や衝動をもつ罪の性質 (sin nature) を抑えること全般を指します。その範囲は非常に広く、思いや言葉の罪から、もっと目に見える行動上の罪まで含まれます。私たちは救われた後も、この肉体に宿る罪の性質から完全に切り離されてはいません。そのた

め、この常に私たちをつまづかせようとする性質を、強い意志と絶え間ない自制によって抑え続けることが必要です。自制の心を持つことによって初めて、私たちは徳(virtue)と霊的成長(spiritual growth)において前進することができるのです。

- ・ **忍耐**—忍耐(ヒュポモネー/ὕπομονη/hypomonē)は、試練に直面したときに必要となる徳です(ヤコブ 1 章 3-4 節; ヘブル 12 章 1 節)。しっかりとしたクリスチャンとしての歩みを始め、神とその御心について学びながら、正しい行動を保つようになると、必ず試される時がやってきます。忍耐と希望は、使徒パウロによって密接に結びつけられています(ローマ 8 章 25 節)。「忍耐」とは、文字通り「試練の重圧の下で踏みとどまること」を意味し、ペテロの挙げた徳の中では希望に最も近いものです。忍耐とは、プレッシャーや試練が強まっても、自分の信仰と実践(たとえば、神のことばを継続して学ぶこと)を貫くことです。希望は忍耐の裏返しのようなものです。死の後に主と永遠に共に生きるという確信、今の壊れやすい体が栄光のからだに復活するという確信、そしてこの世での忠実な奉仕に報いがあるという確信—これらすべてが、今という瞬間を越えた視点を与え、永遠の現実に目を向けさせます。この希望こそが、私たちに耐え抜き、忍び続ける力を与えるのです。
- ・ **敬虔**—敬虔(けいけん:エウセベイア/εὐσεβεία/eusebeia)という徳は、この文脈では特別な意味を持っています。「エウセベイア(εὐσεβεία)」というギリシヤ語は、ローマ皇帝アウグストゥス(オクタウィアヌス)に与えられた称号「アウグストゥス(尊厳なる者)」を訳すのにも使われた語根 *seb-* に由来し、「畏れ」「敬意」「礼拝」といった意味と深く結びついています。したがって、この語自体には「神」という言葉は含まれていませんが、「神を敬う心」「敬虔な生き方」という意味をよく表しています。ローマの文化では、「ピウス(pious) <ラテン語-「敬虔な者」の意>」であるとは、神々、家族、そして祖国に対して果たすべき義務を忠実に果たすことを意味しました。ペテロがここで語る「敬虔」も、同じように「自分に与えられた務めを果たすこと」を指しています。つまり、神から与えられた霊的な賜物をもとに仕えることが、この段階の徳の実践において中心となるのです。信仰を土台とし、正しい行いを学び、聖書を深く知り、罪の性質を抑え、試練に耐える力を身につけたなら—次の段階では、他の信徒たちに対して「与える側」として生きる時です。それこそが、神の御心にかなった、真に「敬虔」な生き方なのです。
- ・ **兄弟愛**—兄弟を愛すること(フィラデルフィア/φίλαδέλφια/philadelphia: 仲間のクリスチャンを愛すること)と**愛**(アガペー/ἀγάπη/agapē: すべての人に向けられたクリスチャンの愛)は、このリストの頂点にある二つの徳で

す。興味深いのは、ペテロがこの二つを分けている点です。これはつまり、私たちはすべての人に愛を示す義務があるものの、まず最初に愛すべき相手は信仰を同じくする仲間(他のクリスチャン)であるということを意味しています。もちろん、これは未信者に対して冷たく接したり、愛を惜しんだりしてよいということではありません。そうではなく、信仰の家族(神の家族)を優先的に世話し、支える責任があるということです([ガラテヤ 6 章 10 節](#)参照)。そして、最後に挙げられているアガペーの愛は、すべての徳を包み込む、最高の徳です。この愛が私たちの生き方を本当に特徴づけるようになるとき、それは他のすべての徳がすでに私たちのうちにあり、しっかりと働いている確かな証拠なのです。

ペテロは、自分の挙げたこれらの徳を持ち、さらに育てていくなら、「わたしたちの主イエス・キリストを知る<英文では「完全に知る」>知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう。」([第二ペテロ 1 章 8 節](#))と述べています。ここで使われている「真の知識」は、ギリシア語でエピグノーシス(ἐπίγνωσις / epignōsis)です。この語は、単なる「知識」(グノーシス / γνώσις / gnōsis)よりも深い意味をもっています。エピグノーシスとは、ただ知っているということではなく、完全で、効果的で、方向づけられた知識——すなわち、心からの理解、信頼、そしてその知識に基づいて実際に行動する姿勢を含んでいます。言い換えれば、エピグノーシスとは、「知っていることを実際に生きる」知識のことです。それは、単なる頭の理解ではなく、信仰に裏づけられた行動をとまなう「生きた知識」であり、徳のある歩みを通して現れるものなのです。

3. 信仰、希望、愛([第一コリント 13 章 13 節](#))：一パウロが挙げたこの三つの基本的な徳(とく)は、ペテロのリストと同じように段階的な成長の流れを表しています。愛(アガペー / ἀγάπη / agāpē)は最終的で最高の徳ですが、実際にそれを生きるためには、まず信仰(ピステイス / πίστις / pístis)と希望(エルピス / ἐλπίς / elpís)が必要です。信仰と希望が育まれることによって、はじめて愛は真に実践されるのです。パウロは、教会が誕生した初期の時代に与えられていた奇跡的な賜物—異言、預言、癒しなど—がやがて終わることを語りました。その代わりに、信仰・希望・愛という三つの徳が私たちキリストのからだに残されるのです。主が再び来られて顔と顔を合わせて見るその日まで、教会を支え導くのは、この徳の実践にほかなりません。つまり奇跡ではなく、日々の愛に根ざした生き方こそがキリスト者に与えられた使命なのです。

・ **信仰**(ピステイス / πίστις)とは、私たちがキリストにあつて新しく生きるための「目」のようなものです。この信仰が、神が私たちに与えてくださった人生の道を進むうえでの道しるべとなります([第二コリント 4 章 18 節](#), [5 章 7 節](#))。イエス・キリストを信じ

る者として、私たちは、世の中の常識や目に見える事実に対してでも、神の言葉を信じます。なぜなら、神の約束こそ真実だからです(第一コリント 1 章 21 節)。世は懸命に私たちの信仰を弱めようとしますが、私たちは神が私たちに与えてくださった約束を信じます(第二コリント 7 章 1 節)。私たちは、キリストが自分の罪の代わりに死なれたことで、罪が赦されたと信じています。キリストとその御業を信じる信仰によって永遠の命が与えられると信じています。今のこの壊れやすい体は、いつの日か朽ちない栄光の体に変えられると信じています。この世の悲しみや涙、苦しみはすべて過ぎ去り、永遠の命の中ではもう存在しないと信じています(黙示録 21 章 4 節)。キリストが先に天へ行き、私たちのために住まいを用意しておられると信じています(ヨハネ 14 章 2-3 節)。これらすべてを信じるのは、神のご性質と約束の確かさを知っているからです(ヘブル 11 章 6 節)。私たちは神のご性質と御言葉の真実を信じます。人生の試練にもかかわらず、私たちは信仰を堅く保ち、その試練に耐えることによって信仰を強めていくのです(ヤコブ 1 章 2-4 節; 第一ペテロ 1 章 6-7 節)。私たちが真理を知っているのは、それを数値化できるからでもなく、証明できるからでもなく、経験的な証拠を提示できるからでもなく、全くその逆で、神の真実さそのものに基づく確信によるものです(ヘブル 11 章 1 節)。私たちの信仰は、それ自体が唯一必要な「証拠」です。ただし、それは私たち自身の力に根ざしているのではなく、神ご自身のご性質(神の誠実さ・真実さ)に根ざしています(第一ペテロ 1 章 21 節)。私たちは信仰を持っています——神に対して、神の御子イエス・キリストに対して、そして神が私たちに与え、聖書の中に記された約束に対して。信仰は、人生の失望や痛みを耐え忍ぶ力を私たちに与えます。なぜなら私たちは、神が私たちの経験するすべてのことを、最終的に私たちの益となるように導いておられると信じているからです(ローマ 8 章 28 節)。

・ **希望**(エルピス/ἐλπίς/elpis)は、信仰(ピステイス/πίστις/pistis)と直接つながっています。私たちの心が、神が約束してくださった見えない、栄光に満ちた未来の現実をしっかりと抱くとき、希望が生まれます。信仰が神とその御子イエス・キリストのご性格と存在に信頼を置くのに対して、希望はその信頼を永遠に向け、来たるべき命の素晴らしい約束に心を定めます。希望は、地上の悲しみの幕を貫く光のように、永遠に主とともに、すべての聖徒とともに、完全な体でいるという言葉に尽くせない喜びへと焦点を合わせます。希望は、永遠にまで届く「信仰の目」の一部であり、見えないこれらの驚くべき現実を確かにあるものとして受けとめます(ローマ 8 章 23-25 節)。私たちの希望は空想ではなく、見えなくても確かな現実です。それゆえに私たちは、この世を離れ、主の御前で永遠に生きる新しい体をいただく日を切に待ち望みます(第二コリント 5 章 1-9 節)。私たちは、この世の一時的な宝ではなく、モーセのように、神がくださる報いに目を向けています(ヘブル 11 章 26 節)。この希望——神がこれらすべてのすばらしい約束を必ず成し遂げてくださるという確信——こそが、私たちの思い

を天にしっかりと結びつけてくれます。そこに、私たちの主がすでに行かれ、すべてを整えてくださっています([ヘブル 6 章 18-20 節](#))。

・愛(アガペー／ἀγάπη／agápē)は、私たちが成熟へと歩む中で、この希望([コロサイ 1 章 4-5 節](#))の上に築かれます。神に対する完全で確かな信頼をもって、真の永遠の現実に目を向けるとき、私たちは心のすべてをもって主を愛し、その愛を他の人々に映し出すことができるようになります([マタイ 5 章 14-16 節](#))。愛は、神から始まらなければなりません([第一ヨハネ 4 章 19 節](#))。神は愛であり、私たちが愛することができるのは、神がその愛を私たちに与えてくださったからです([第一ヨハネ 4 章 7-8 節](#))。神の私たちへの愛は、御子イエス・キリストが私たちの身代わりとして死なれたという、その贈り物の中に示されています([ヨハネ 3 章 16 節](#))。では、私たちがまだ神に敵対していたときに死の力から救い出してくださった方を、どうして愛さずにいられるでしょうか([ローマ 5 章 8 節](#))。それゆえに、私たちはイエス・キリストの愛の犠牲を通して、神が豊かに与えてくださった救いに対して感謝と喜びを感じます([ヨハネ 15 章 13 節](#))。信じる者としての私たちの最も大切な命令は、神が私たちに注いでくださった驚くべき愛を、他の信仰者に対しても示すことです([ヨハネ 15 章 12 節](#))。愛はすべての徳の中で最も偉大なものであり([第一コリント 13 章 13 節](#))、成熟した信仰を形づくる「絆」として、他のすべての徳を結び合わせ、私たちがキリストに従って歩むことを確かなものにします([コロサイ 3 章 12-14 節](#))。

信仰は、神の確かさに目を向けます。私たちは神を信頼しているからこそ、信仰によって神に従います。

希望は、神が私たちに与えてくださった約束に目を向けます。私たちは、この世の生を喜びをもって耐え忍びます。なぜなら、永遠に続くはるかにすぐれた命が約束されているからです。

愛は、神がイエス・キリストによって私たちのためにしてくださったことに感謝し、その感謝を他の人々に表します。神がまず私たちを愛してくださったからこそ、私たちは愛によって神とその教会に仕えます。

これら三つの徳(信仰・希望・愛)は、私たちの思いから決して遠ざけてはなりません。これらによって、私たちの心はこの世の厳しい現実の表面を取り除き、目には見えない大切な真実——すなわち、神の御性質、破られることのない神の約束、そして言葉では言い尽くせない神の愛——をはっきりと見ることができます。信仰、希望、そして愛

は、常に私たちの思いが流れていくべき「通路」です。これらはまた、私たちのクリスチャンとしての歩みを絶えず省み、正しく保つための「基準」となるものです。

・**適用の両極**： 救い至る「狭い門」へ続くまっすぐな道を歩もうとするとき([マタイ 7 章 14 節](#))、神のことばは私たちを導く標識を与えてくれます。それらは、私たちが道をそれないように助ける「縁石」として、極端に片寄ってしまうときに警告してくれるものです。最も明確な「負の」標識は、神が与えられた禁令——たとえば「盗んではならない」([出エジプト 20 章 15 節](#))などです。一方、究極の「正の」標識は、「互いに愛し合いなさい」([ヨハネ 13 章 34 節](#))という戒めです。しかし、聖書はこの二つ以外にも、私たちの行動を正しく導く多くの指標を与えています。以下はいくつかの例であり、行動の「適用の両極」として、信仰生活を方向づけてくれるものです。

(+)喜びなさいと教えられています([ピリピ 4 章 4 節](#))。(-)不平を言ってはならないと教えられています([ピリピ 2 章 14 節](#))。

(+)あわれみ深くありなさいと教えられています([ヤコブ 2 章 13 節](#))。(-)裁いてはならないと教えられています([マタイ 7 章 1-2 節](#))。

(+)寛容でありなさいと教えられています([ピリピ 4 章 5 節](#))。(-)怒りを抑えなさいと教えられています([エペソ 4 章 26 節](#))。

このような肯定的・否定的な指針は、聖書の中に至るところに見られます。

私たちは、自分のクリスチャンとしての歩みを照らし合わせるための、いくつかの一覧を与えられています。たとえば、ヤコブは、上からくる知恵を説明する中で、徳のある生き方の肯定的な特徴を挙げています——「清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い」([ヤコブ 3 章 17 節](#))。一方、パウロは、終わりの日の人々の性質を描きながら、避けるべき悪徳をいくつも列挙しています「自分を愛する者<うぬぼれている者-別訳>、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快樂を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者」([第二テモテ 3 章 2-5 節](#))。これらの性質——良いものも悪いものも——を自分に当てはめて考えるとき、私たちは、良いものを見習い、悪いものは避けるよう努力すべきでしょう。

聖書のほとんどすべてのページには、このような指針が示されています。これらを謙虚な心で読み取るなら、私たちのクリスチャンとしての歩みを導き、形づくり、神が望まれる徳のある生き方を育てる助けとなります。このような具体的な指針はとても重要です。なぜなら、上に挙げたリストからもわかるように、「愛しなさい」や「罪を犯してはならない」といった命令は意味がとても広いため、私たちは自分が実際よりもうまくやっていると錯覚してしまいやすいからです。ですから、聖書を読むときには、そこに書かれている言葉が何を意味しているのかをよく考え、自分の生き方がその教えに本当になんかかっているかどうか、自らに問いかける習慣を持つことが大切です。

たとえば、[テトス2章12節](#)でパウロが、慎み深く、正しく、信心深く生きようと語っているとき、私たちはそれぞれの性質が何を意味しているのかを考えるべきです。

慎み深さ: 罪に結びついたり、霊的に危険な行動に対して、賢く注意深くあること。

正しさ: 誠実で、公正で、正しい行動をとること。

信心深さ: 非の打ちどころのない方法で、自分に与えられた霊的な務めを果たすこと。

このようにして、私たちは与えられたあらゆる機会を最大限に生かし、自分の行いを点検し、神の言葉という基準に従って少しずつ整えていくことができるのです。

5. 反応的な実践: 理想を言えば、あらゆる機会において、積極的に徳(virtue)の原則を実生活の中で実践していくことが望まれます。しかし、日常生活の慌ただしさに気を取られやすい私たちにとって、徳に基づく思考(ヴァーチャー・シンキング)は、瞬間的な霊的失敗に対する正しい反応としても役立つことを覚えておくといよいでしょう。つまり、つまずいたり、間違った判断をしてしまったときにも、徳の原則に立ち返ることで、再び正しい霊的行動へと心に向け直すことができるのです。

あらゆる種類の罪は、霊的な後退を引き起こします。たとえ「ささいな」態度のゆるみのように見えるものであっても、それは告白(神への個人的な祈りの中で:[第一ヨハネ1章9節](#))を必要とします。それでも、このような失敗は、私たちが徳に心に向け直すきっかけにもなり得ます。特に、自分が陥った罪と正反対の徳を意識することで、再び正しい方向へ思いを立て直すことができるのです。

人間の本质の中で、こうした霊的な状態を見守り、調整する働きを担っている部分—すなわち、霊的な失敗の前には予防的に、後には是正的に作用する部分—それが良心です。「良心」とは、さまざまな状況の中で、何が正しく、何が間違っているかを思い起こさせるように、心が私たちを促す働きのことです。信仰を持たない人であっても、正邪の感覚を本能的に備えています([ローマ2章15節](#))。しかし、キリスト者である私

私たちは、毎日少しずつ、自分の良心を形づくり、正し、磨き上げているのです([第一コリント 8 章 7-12 節](#), [10 章 25-29 節](#))。

私たちはまた、聖霊という、良心を助けてくださる助け主を与えられています。実際、聖書は私たちに対して、聖霊の働きを妨げたり、無力化したりしないようにはっきり命じています([エペソ 4 章 30 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#))。

ですから、自分の生活の中に悪い傾向や否定的なことに気づいたときには、単にそれを拒むだけでなく、その機会を利用して、自分の思考を積極的に正しい方向へ立て直すことが大切です。結局のところ、「良心が健全であること」は、「きよい心から出る愛」と「偽りのない信仰」の一部であり([第一テモテ 1 章 5 節](#))、神が私たちに求めておられる生き方そのものなのです。

6. 重圧の中での徳: 苦しみは、徳を最もよく育てるものです([ローマ 5 章 3-5 節](#); [ヤコブ 1 章 2-4 節](#); [第一ペテロ 1 章 6-7 節](#))。キリスト者として本当に成長するためには、困難や逆境を「世の中とはまったく異なる視点」で受け止めることを学ばなければなりません。つまり、「苦しみを誇りとすること」([ローマ 5 章 3 節](#))、「すべてを喜びとみなすこと」([ヤコブ 1 章 2 節](#))、そして「信仰の試練は純金よりも価値がある」と認めることです([第一ペテロ 1 章 7 節](#))。私たちは、何の妨げもない贅沢で平穏で裕福な人生に召されたわけではありません。実際のところ、成長すればするほど、神によってさらに試され、練り清められることが増えていきます。主イエスが言われたように、「わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさる」([ヨハネ 15 章 2 節](#))—苦しみの中で徳を育てること、それこそが、キリストの弟子としての歩みの中心なのです。

クリスチャンの人生には、行動の空白(何もしない状態)というものはありえません。霊的な確かさは、霊的な前進と常に結びついています([ピリピ 2 章 12 節](#); [第二ペテロ 1 章 10 節](#); [第一ヨハネ 2 章 24 節](#), [第二ヨハネ 1 章 8 節](#))。また、長く信仰生活を送っていることがそのまま霊的成長を意味するわけでもありません([ヘブル 5 章 12 節](#))。成長には試練が伴い、成長すればするほど試練も大きくなります。これは、使徒パウロが極めて厳しい状況の中で生きたことを見れば明らかです([第一コリント 4 章 9-13 節](#); [第二コリント 6 章 1-13 節](#), [11 章 16-33 節](#))。なぜなら、私たちが真理を多く学べば学ぶほど、その真理を生活の中で実践する責任も大きくなるからです([ヤコブ 4 章 17 節](#))。真理の基本的な原則を学ぶことを「霊的な栄養」をとることにたとえるなら、そのみことばを実生活で実践することは、まさに「霊的な運動」にあたります。ちょうど、筋

肉を鍛えるために重りを持ち上げ、適切な栄養と合わせて成長させるように、神もまた私たちが霊的な重りによって鍛えられます。それは、試練、つまり困難な選択、苦しみ、喪失、祈りの遅れなどの形で与えられます。私たちがこれらの重りを忍耐をもって持ち上げ続けるなら、信仰という霊的な筋肉は確実に鍛えられ、霊的な成長を遂げるのです([第一テモテ 4 章 7-8 節](#))。

クリスチャンが、特にまじめに信仰の成長を目指して歩もうとする者が、厳しい試練に出会うことは自然なことです。その試練はときに、信仰を強く揺さぶるほどに困難なものになることもあります。アブラハムのことを思い出しましょう。彼は、長い間待ち望んだ跡継ぎの約束を神が実現してくださると信じるのに、最初は苦勞しました。しかし最終的には、神の命令に従ってその跡継ぎをいけにえとしてささげようとしたのです。なぜなら、彼は神がすべてを最善に導かれると信じていたからです。また、ヨブのことも思い起こしましょう。彼は長い間、耐えがたいほどの苦しみを耐え続けましたが、最後にはついに忍耐を失い、神から叱責を受けました。神はヨブにご自身の偉大な力と計画に対する人間の限られた理解を思い起こさせたのです。私たちも、なぜ苦しむのか理解できないことがあります。しかしそのようなときこそ、神にはその苦しみにも確かな理由があると信じ、神がご自身の時と方法で最善をなしてくださると信頼すべきです。さらに、神は私たちに明確な約束を与えておられます。「あなたがたが耐えられないような試練に会わせることはない。むしろ、試練とともに、そこから逃れる道も備えてくださる」([第一コリント 10 章 13 節](#))と。深い悲しみや失望、苛立ち、喪失、失敗の中で、もう前に進めないと感じることもあるかもしれませんが、しかし、そのようなときこそ、神が助けくださると信じ、神がすべてを私たちの益のために働かせてくださる([ローマ 8 章 28 節](#))と信頼し続けることが大切です。

苦しみは、結局のところ、私たちの神への信仰、神の救いへの確かな希望、そしてどんな状況でも神を愛し続ける心が試される、究極のテストです。涙と苦勞に満ちたこの人生を歩む中で、私たちは本当に——悲しみのただ中で神を信頼できるでしょうか。今の痛みの向こうにある栄光に満ちた未来を見つめることができるでしょうか。たとえ苦しみの中にあっても、神を愛し続け、神の御手を取り、その痛みさえも目的を持っていると信じることができるでしょうか。神は、今の苦しみを通して、私たちに永遠の「重い栄光」を備えてくださっています。それは、どんな現在の苦しみとも比べものにならないものです([第二コリント 4 章 17 節](#))。多くのクリスチャンは、人生が順調なときには、神を信頼し、希望を持ち、神を愛することができます。しかし、人生の嵐が激しく吹きつけるとき、ゆるぎない信頼、永遠への希望、痛みの中でも神とその民を愛する心を保つのは、はるかに難しいことです。けれども、まさにそのようなときこそ、私たちの霊的な人格が本当に試され、私たちの中に根ざしたクリスチャンとしての徳が、どれほど深く働

いているかが明らかになるのです。

7. 祈り：祈りは、神との絶え間ない対話です([第一テサロニケ 5 章 17 節](#))。[ピリピ 4 章 6-8 節](#)でパウロは、心配せず、あらゆる願いを祈りによって神にゆだねるよう勧めています。そうすれば、人間の理解を超えた神の平安が、私たちの心と思いを守ってくさるのです。祈りによって得られるこの神の平安の中で、私たちは神を信頼し、神を愛し、神の約束が必ず成就すると確信します。そして、神の国とその義をまず第一に求めるなら([マタイ 6 章 25-33 節](#))、他のすべての必要は神が備えてくださるのです。祈り——特に、続けて祈り続けることは——、キリスト者が徳を実生活に生かすうえで欠かせない習慣です。祈りは、私たちの思いを神に向け直すものです。祈るとき、私たちは自分の小ささと神の助けへの深い必要を思い出します。そのとき、私たちの思いは再び神の思いと一致する方向へ導かれるのです。

8. 黙想：詩篇第 1 篇には、「主の教えを喜びとし、昼も夜もその教えを思う人は幸いである」([2 節](#))と書かれています。聖書の一つひとつの言葉、ほんのわずかな教えでさえも、私たちの理解を深め、日ごとに強められていく成熟した信仰の土台を形づくります。それは、すぐにはわからない形でも、確かに私たちの中に働いています。もちろん、私たちは一日じゅう、主とその教えについて学ぶことだけに時間を費やすことはできません。しかし、日々の生活の中には、ふとしたすき間の時間があるものです。そのような時、私たちの思いはどこに向かっているのでしょうか。心配や問題ばかりを考えていないでしょうか。むしろ、そのような時間を使って、私たちの心をもう一度神の真理に向け、御言葉の中にある大切な真理を思い起こすことで、魂を新たにすべきではないでしょうか。

ちょうど私たちの体が、血が絶えず流れていることで働いているように、私たちの霊もまた、絶え間なく真理によって養われるべきです。愛と感謝の心で神を見つめること、神の約束を信じる信仰、そして永遠の報いへの希望など——こうした基本的な徳の原則に思いを集中させることは、この働きを始める良い方法です。そうすることで、心の中にたくわえられたすばらしい「霊的な財産」である真理を引き出すことができます。できるかぎり頻繁に、私たちの思いの中でこの真理を「巡らせて」いきましょう。そうすれば、「上にあるものを求めなさい」そこにはキリストがおられる([コロサイ 3 章 1-2 節](#))という御言葉の命令を生きることができるのです。

結論：日々の歩みの中で大切な事柄に関わる主要なキリスト教の徳(教え)に、心を集中する習慣を身につけることは、神のご計画と目的の中で自分がどこにいるのかを

意識し続けるうえで、とても有益な方法です。そしてそれは、霊的成長に欠かせない要素でもあります。神の御心を知り、それを実行することが、「徳の思考」の目標です([コロサイ 1 章 9-10 節](#); [ローマ 12 章 2 節](#))。私たちが自分の行動を形づくるべき徳について思いを巡らせるとき、自然と自分の信仰の歩みを見つめ直し、自らの行いを神の御心により近づけたいという思いに駆り立てられるのです([エペソ 5 章 18 節](#))。

神への信頼、神の私たちへの愛(それを私たちが映し出すべきもの)、そして神と共に過ごす永遠の希望——これらに心向け続けることができるようになるとき、私たちは深い満足を得るようになります。その満足は、人生の欲望や心配、試練に対する最良の解毒薬であり、またそれは、神の力と御人格に信仰・希望・愛を置いたクリスチャンだけがたどり着ける境地です([第二コリント 9 章 8 節](#); [ピリピ 4 章 10-14 節](#); [第一テモテ 6 章 8-10 節](#); [ヘブル 13 章 5-6 節](#)):

- 私たちは、すべての困難の中で神を信頼し、神が私たちの手を取って導いてくださることを信じる時、信仰に心向けます。たとえ行き先が分からなくても、神が私たちにとって最善をしてくださると信じているので、恐れることはありません([詩篇 23 篇](#); [ローマ 8 章 28 節](#))。

- 私たちは、神がどれほど私たちを愛しておられるか——ご自身の御子を犠牲にするほどに([ヨハネ 3 章 16 節](#))——を思い出さず、愛に心向けます。そんな大きな愛をもってくださる神が、決して私たちをその愛から引き離されることはない知っているからです([ローマ 8 章 31-39 節](#))。そして、その愛に信頼して、私たちは神の栄光のために、その愛を周りの人々に映し出そうと努めます。

- 私たちは、希望に心向けるとき、この地上での人生が一時的なものであること、そしてやがて神の御前で永遠に続く命が待っていることを思い出します。その命は、苦しみのない永遠の喜びに満ち、栄光に輝く新しい体を与えられ、それぞれが自分の居場所を持つ新しいエルサレムで過ごす人生なのです。

キリスト教の徳とは、ただ学ぶだけでなく、実際に生きることで成熟へとつながる「真理の原則」です。だからこそ、これらの真理は私たちが日々思いめぐらすべき大切なものなのです。私たちがついには心それらにしっかりと向けるとき、キリストを信じる者として本当に大切なこと——永遠に価値あるもの——に心が向けられ続けるのです。

[ペテロ#18「クリスチャンの生産と永遠の報酬」に続く]